

# 暗室と顕微鏡

ルビー写真

## 農

正門前に伸びる旧中山道を一分も歩かないところにルビー写真はある。昔ながらの店先。奥に向かって声をかけると、職人風のご主人が現れた。松田正男さんだ。

石川県生まれの正男さんがここで商売を始めたのは昭和37年。先に上京しカメラ問屋で働いていた兄の進二さんに「東京でカメラの小売りをやってみないか」と誘われたのがきっかけだ。歳でもう店を畳むというカメラ店の話を進二さんが聞きつけ、そこを二人で買い取って開業した。

小さな構えだったが、写真人気が高まる時代の流れで、商売は繁盛した。俄かカメラマンたちの写真はピントが甘く、それをうまく焼くには露光などの腕が必要だ。いまのような全自動プリンターはもちろんないので、夜通し暗室に籠りながら勘と経験を磨いた。

農学部の学生たちもよくフィルムを持ち込んできた。「顕微鏡に装着したカメラで、実験試料を何百枚も撮るんですが、プリントはいつもここにお願いしていました」応用生命化学専攻の



ルビー写真ご店主 松田正男さん(右)と三坂巧准教授(左)



実験のネガフィルムとプリント



暗室で引き伸ばし機を操る

三坂巧准教授はそうやって古いファイルを見せた。抽象画のような細胞の断面がいくつも並んでいる。

「ピントがちゃんと合っているかどうか、写真を見るまでわからないので気が急いたものです。研究は、時間との勝負ですから」と三坂先生は笑う。正男さんは紙焼きをいつも小一時間で仕上げたという。これは当時としては異例の早さだ。

「農学部の教授にもずいぶんお世話になりました」と正男さんは振り返る。「大阪万博のころ、展示パビリオンを写した立体写真というのがあり、それを先生方が面白がって買ってくれました」。写真が趣味の教授たちもカメラを買うのにこの店を最良にした。

教授たちの退官時には正男さんが記念写真を撮ったが、その習慣はいまも続いている。

古い記念写真のひとつを見ながら三坂先生がいう。「学生時代に教わった先生がここに写っています。自分たちもいつかこうして写真に収まる時がくるかと思うと感慨深いですね。農学部の歴史がここにあります」。正男さんの口元が優しくほころんだ。



◎お問い合わせ

ルビー写真

西片店/国立店/入間川店

住所: 〒113-0031文京区西片2-21-6

電話: 03-3813-0712

<営業時間>

年中無休

平日 8:00-18:30

日曜・祭日 9:00-18:00

